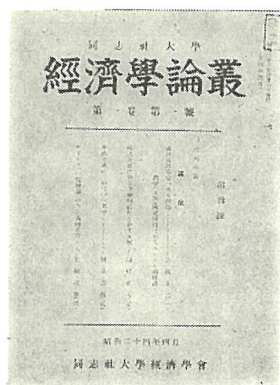


『経済学論叢』



「経済学論叢」は同志社大学経済学部が構成している経済学会の機関誌であって、現在年六回出版されている。執筆者はおもに経済学部に属する専任教員および大学院博士課程に

籍者である。ときに本学に関係の深い他大学や研究機関の先生に執筆していただくこともあるが、現在までのところその数はきわめて少ない。経済学論叢はしたがって本学に属す

る研究者たちがその研究成果を学界に問うために出版されているといつてよい。

ときどき卒業生や学生さんから、いったい経済学論叢は学界でどの程度の評価をうけているかという質問をうけることがある。もちろん高い評価をうけているという答を期待する身びいきの気持がその背後にある。しかし今日の学会誌は学外の人たちが容易に理解しにくいような独得な性格をもっている。

まず経済学でも分野が細かくわかれ、ある専門分野の人が他の専門分野の業績を十分に理解しえなくなっているという事情がある。日本では研究者が早くから専門の鑄型にはめられるせいとか、とくにその傾向がつよい。残念なことはいくつもの領域にまたがって仕事をする人、またできる人の数は次第に少なくなってきた。そうなると自分の専門領域以外の論文は理解できないばかりか、関心もなくなつて読む興味をもうしなう。ひとつの学会誌にあらわれたすべての論文をよみ、その全体としての水準を評価するというようなことは今日ではほとんど考えられないのである。

さらにそれぞれの分野において出版される

論文の数が年々非常な勢いでふえており、それを収集分類するだけで大変な労力を必要とすることがある。ましてそれらをすべて読み、消化することは不可能に近い。私についていえば外国の専門雑誌数種類と交通関係の政府出版物、それに日本で出版される代表的な専門雑誌数種類に目をおすだけで一杯である。恥かしながら各大学の紀要のなかから交通関係の論文をひろって読むということすら、長年したことがない。ときに友人や若い研究者から紀要の論文の抜き刷りを送ってもらうことがある。そのばあいにはかなり注意してよむが、全体としてみればその数は少ない。たとえばいま日本に交通専門家が五百人いるとしよう。その人たちが年に一編ずつ論文を書くとなると、その数は五百編、それらを消化するためには少なくとも一日に二編の論文は読まなければならない。そのほかに関連領域の論文の数は同じように多いし、外国雑誌や書物も大量に出版されている。ときどき今より以上に雑誌がふえ、論文の数がふえれば、どうなるだろうかと思ったりする。論文の数が多いということは研究が盛んになったということではあるだろうが、同時にそれ

を収集分類するためにもっと多くの人手と費用を要し、それを吸収消化するためにもっと多くの時間を必要とするということでもあ

る。もうひとつの事情は、経済学が急速に変わりつつあるということである。一九三三年エドワード・チェンバリンが「独占的競争の理論」を出版したとき、多くの人は「新しい数理経済学の展開」と評価した。今日ではチェンバリンを読んでもそれが数理経済学であると考えた人はいない。チェンバリンには数学はほとんどないし、あったとしても高校生が十分理解できる程度のものである。経済学はそれほど早く変化したのであり、しかもその変化はとくにここ二十年ほど、加速度的となっている。しばらくでもその変化のフォローをなまけていると、すぐわけがわからなくなってしまう。「同志社論叢」以来何十年にわたって書かれてきた同志社に属する研究者たちの論文をよみかえてみると、今日でもその命脈をたもっていると思われるものはほとんどない。たいていの論文は出版された当時は新知識であったにしても、今日になってみるときわめて初歩的で幼稚なものになってしまっ

ているのである。

このような状況のなかで一大学の紀要はどういう意味をもつのであろうか。そのなかのいくつかの論文は同じような研究に従事している他の研究者の目にふれるかもしれない。なかには他の研究者たちによって非常に高い評価をうけるものもあるかもしれない。また執筆者は抜き刷りを十数人の先輩や同僚に配布して批判をおおぐかもしれない。しかし大部分の論文は執筆者の自己満足だけを残してすぐ忘れさられる運命にある。日本の大学では教員の地位はおもにかれが書いた論文の「数」が決定する制度となっているから、ひょっとすると執筆者はその論文を書いたことによつて教授に昇進したかもしれない。しかしかれの論文が命を永らえ、経済学説史のなかにその痕跡をとどめるということはほとんどないと考えてよいであろう。たいていの研究者はその人生のごく短かい期間に、人類が共有している知識の集積にほんのわずかの新しい要素をつけ加えて、まもなく忘れさられる。それでも新しい要素をつけ加えることができた人は幸いである。たいていの研究者はそれさえもできずに消えさるのである。

情報がゆたかになりすぎた今日では、かえって新しいすぐれた業績でも埋もれたまま発見されもしないで過ぎてしまふばあいがふえるであろう。マーシャルが四十年以上ものちになって、他国の、しかも経済学以外の技術専門誌にのったデュピュイの消費者余剰にかんする論文を掘りおこしたようなことはもうありえないのではないかと思ったりもする。しかしわが「経済学論叢」のなかにたとえ埋もれたままになったとしても、デュピュイのような論文が一編でもうまれば実にすばらしいことではないだろうか。経済学論叢は経済学部に属する研究者たちの機関誌である。それは昇進をえるために書きあげられた論文（それも現在の日本では必要悪だろうが）や雑文にたぐいするガラクタのなかに、いつの日か珠玉のような一編が生まれることを期待して、そして経済学の共有の知識の集積に新しい何かが加えられることを期待して、今年に六回出版されている。

（棚原胖夫・大学経済学部教授）

同志社関係出版物

新島 襄（岡本清一著）	同志社大学出版部	¥ 300
新島 襄（魚木忠一著）	〃	¥ 300
同志社一その80年の歩みー（同志社大学総務課編）	〃	¥ 100
一私学の歩み（上）（編者代表・秦孝治郎）	〃	¥ 130
ミルトン研究（越智文雄著）	〃	¥ 800
同志社設立の始末（新島 襄） 同志社大学設立の旨意	学校法人同志社	¥ 100
同志社90年小史（同志社々々史料編集所編）	〃	¥ 3,000
同志社歌集（同志社歌集編集委員会編）	〃	¥ 150
新島襄書簡集（編者代表・住谷悦治）	岩 波 書 店	¥ 210
同志社大学 一大学シリーズー（奥村芳太郎編）	毎 日 新 聞 社	¥ 1,000
My Younger Days（新島 襄）	同 志 社 校 友 会	¥ 100

取扱・同志社収益事業課